

本年度テーマ	主体的な学びや協働的な学びをととした学習のあり方について	事業内容	高知西：スーパーグローバルハイスクール事業について
--------	------------------------------	------	---------------------------

【概要・目的】

本県におけるグローバル教育では、生徒が授業や課題研究に取り組む中で、論理的思考力や判断力、表現力を身につけるとともに、英語運用能力の向上を図り、将来グローバル人材として活躍できる資質を育成することを目的としている。生徒が学習を進めていく中で、どのような活動が必要で、それらをどのような手順で積み重ねていくのかについて、具体的に示して指導することが必要である。本年度は、学習の振り返りを中心に協議。

平成28年度の当初計画 (P)

●目指すグローバル・リーダー像

郷土や我が国、国際社会の発展に貢献する志をもち、高知から世界へチャレンジできる人材、あるいは、国際社会で活躍できる人材。

【本年度の取組内容】

1 グローバル探究の充実

(1)グローバル探究Ⅰ

①探究スキルを育成するために、インタビューの仕方、まとめ方(KJ法)、発表方法についての演習を指導計画に編成。

②グローバル思考を醸成するための講義・演習を指導計画に編成。

(2)グローバル探究Ⅱ

①課題解決の意義と一般的な探究方法を学習したうえで探究活動に移るよう計画。

②3～5名のクラス横断的なグループを編成。

③構想発表会、夏季アクションプラン、中間発表会(大学教員による指導・助言)の設定。

2 英語学習の充実

(1)英語における課題研究(主に2年)

(2)多読・多聴・多書・多話(1年、2年)

3 教科・科目のSGH化(探究型学習)

4 評価の充実

5 中四国のSGH校との連携

6 探究学習の成果を発表する場の設定

①「ハイスクール世界サミット in 福島」(福島県、8月6日)

②「世界津波の日『高校生サミット』」(黒潮町、11月25・26日)

③「国際問題を考える日」(兵庫県・大阪大学、2月11日)

④その他コンテストへの応募

高知県地方創生アイデアコンテスト(12月18日)

SGH甲子園(関西学院大学、3月19日)

7 組織体制の充実

平成28年度の取り組み状況 (D)

1 グローバル探究の充実

(1)グローバル探究Ⅰ

1学期は、「聞く」「見る」「感じる」を通して、地域の強みと弱みについて確認した。2学期は、高知をSWOT分析したり、各リサーチ活動を通して高知を巨視的かつ微視的に考察した。2学期後半から探究活動の結果をまとめている。

○県内リサーチ(8月24日、7地域、1年生全員)

JA馬路村、旭食品、JA土佐れいほく、太陽、四国銀行、ひまわり乳業、渋谷食品、日高わのわ会、高知アイス、ど久礼もん企業組合、ニッポン高度紙工業、四万十ドラマ、梶原町、集落活動センター「はつせ」

○大阪リサーチ(8月1・2日、20名)

高知県大阪事務所、大阪大学法学部、サントリー・グローバルイノベーションセンター、大阪・神戸米国総領事館

○海外リサーチ

オーストラリア(7月23日～8月10日、9名)、香港(9月18日～22日、6名)

シンガポール(9月20日～24日、11名)、台湾(9月28日～10月2日、4名)

○大阪・海外リサーチ発表会(10月26日)

生徒の視点からの社会情勢について、及びグローバル企業の価値を最大化させる取組について発表。

○「食を活かした地域創生モデル」構想発表会(11月9日)

「探究フローチャート」(要旨・テーマ設定理由・地域の現状・先行研究・調査内容・考察・結論)を活用し、グループによる発表。視聴者は、評価シートに各発表の要旨とテーマ設定理由、助言を記述してフィードバックを行った。

○東京リサーチ(1月27日、32企業)

企業担当者に地域創生モデルのプレゼンテーションを行い、内容等について評価頂くとともに、食料自給率40%における企業活動の実際と食をグローバル展開する上での取り組みについて調査・探究した。

○「食を活かした地域創生モデル」発表会(2月8・15日)

東京リサーチでの指導・助言を盛り込んだポスターを作成し、クラスで発表する。各発表に対しての担任及び生徒による評価・フィードバックを行うとともに、クラス代表を選出する。翌週、学年発表会を実施し、大学教員等の選考を経て最優秀発表グループを選出する。

【成果】

①「意見をはっきり述べる」、「多数の意見をまとめ一つに方向づけができる」、「提案して他の者の発言をうながす」等、リーダーシップを発揮する場面が増えてきた。

②探究の厳しさや難しさを経験しつつも、探究内容は昨年度に比して充実したものとなっている。

課題と今後の取り組み (C、A)

課題

1 グローバル探究の充実

(1)グローバル探究Ⅰ

①安易な方法で情報を収集し、検証もなく使用するグループが見られた。

②グループ独自の発想(アイディア)が生まれていない。

③探究活動や班活動の苦手な生徒が、十分参加することなく活動が進んでしまう。

(2)グローバル探究Ⅱ

①地域や国際社会への興味・関心・問題点の認識は高くなってきているが、より深く問題点を考察するには至っていない。

②提出された研究論文は論拠が明確になっておらず、エッセー的なものや調べ学習的ものが多かった。

③グループ員の構成により積極的に取り組むグループと、グループ員のコミュニケーションがとれず、一部の生徒に負担がかかるグループがあった。

④やらされ感のある生徒、消極的な生徒への指導に課題が残った。

2 英語学習の充実

①英語授業でのリサーチ活動については、多くの生徒が日本語サイトを活用し、普通科のグループ協議は日本語使用が多い。

②英語でされたプレゼン内容を十分理解できないために、意見交換が浅い内容になっている。

③スキーマを同じくする日本人にのみ分かる英語になりがちである。

④「英語でディスカッションできる」生徒・・・普通科3名、英語科10名程度

3 教科・科目のSGH化(探究型学習)

①方法先行の授業となっており、目標設定(目指す生徒像・教室像)が不明瞭である。

②事象に対するグローバルの視点が欠如している。

③指導と評価が表裏一体であるという認識が不十分である。

【平成28年度 到達目標】

学習の振り返りをし、学習者の取得状況を教員及び学習者にフィードバックする



自分で「課題を発見する力」、「課題を解決する力」、「考える力」を身に付けている。

平成 28 年度の取り組み状況 (D)

- ③グループで協働する喜びや連帯を経験できている。
- ④皆勤率…61.9% (2学期中間考査終了時)、52.3% (2学期末)
- ⑤病気・経済的理由以外の長期欠席者…なし (2学期末)

(2) グローバル探究 II

自らの興味・関心に基づいてテーマ設定し、微視的かつ巨視的に問題を考察するとともに、帰納的もしくは演繹的アプローチにより問題解決に取り組んできた。

○東北リサーチ(7月 12 日～15 日、5名)

陸前高田市高台視察、広田半島営農組合、気仙沼市役所、紫市場、屋台村訪

○海外リサーチ

オーストラリア(7月 23 日～8月 10 日、2名)、香港(9月 18 日～22 日、4名)
台湾(9月 28 日～10月 2日、6名)

○中間発表会(10月 21 日)

大学教員8名を招聘し、指導・助言を頂いた。

○海外リサーチ発表会・津波サミット事前発表(11月 11 日)

自グループの探究テーマにリサーチを通して得られた知見を組み入れて発表。津波サミット参加グループは英語による発表。

○「食を活かした地域創生モデル」発表会(2月 22 日)

提出された課題論文からクラス代表を選出。校内SGH推進委員会で優秀論文を選考、当該グループは平成 28 年度SGH成果発表会にて発表。なお、3月に代表外グループによるクラス発表会を計画。

【成果】

- ①高知県という身近な「地域」と世界の抱える課題(Global Issue)についての共通点や関連性を考える契機となった。
- ②アンケート内容の妥当性を検討したり、聞き取り調査の実施に伴う電話対応や訪問対応の方法等、探究方法が身についた。
- ③研究論文の作成を通して、探究活動に目的、仮説、論拠、実証などが重要であることを理解できた。
- ④提出された研究論文のうち、目的の明示・分析方法・解釈まとめ・成果の水準の観点において、「十分満足できる」と評価できる…5/67 グループ
- ⑥皆勤率…52.7% (2学期中間考査終了時)、46.9% (2学期末)
- ⑦病気・経済的理由以外の長期欠席者…なし (2学期末)

2 英語学習の充実

(1) 英語における課題研究(主に2年)

英語表現 II (普)、Global Education I (英)

○探究サブテーマである Food and Religion/Belief , Food and Language/Culture , Fair Trade に関して、概論理解・リサーチ活動・プレゼンテーションによる授業を実施

○Fair Trade に関して、外部講師による一斉講義の実施(1年全員、9月21日)

○Food and Religion/Belief に関して、外部講師による授業の実施(2年クラス別、2月中旬)

○Food and Language/Culture に関して、外部講師8名(予定)を招聘してのプレゼンテーション授業の実施(2年英語科、2月中旬)

○探究活動を通して身に付けてほしい知識・理解についての自己評価、英語運用能力に関する意識調査を実施(各 11 項目、1月末)

(2) 多読・多聴・多書・多話(1年、2年)

○多読は、MReader を利用した読書活動を授業内外で実施

目標達成率別人数

	年間目標	期間目標	0-24%	25-49%	50-74%	75-99%	100%
EE I (普)	37,500	7,500	6	0	17	36	181
PE I (英)	250,000	50,000	23	0	10	4	5
EE II (普)	100,000	20,000	175	0	20	16	25
PE II (英)	100,000	20,000	機器の不具合により測定不能				

課題と今後の取り組み (C、A)

4 評価の充実

- ①振り返りシートは毎時記述させたが、「省察する」という点においては不十分であった。担当教員の生徒理解にはつながったが、カリキュラムへのフィードバックという点では課題が残った。
- ②「グローバル・リーダーの資質・力量に関する意識調査」については、継続的に実施できたが、教員や生徒へのフィードバックを教育計画に盛り込む必要がある。
- ③教員による「グローバル・リーダーの資質・力量に関する評価」は協働的に実施することができた。慣れることによって評価の精度が高まっていくと期待できる。

平成 29 年度の取組

1 グローバル探究の充実

- ①系統性を考慮しながら年間指導計画の改善充実を図る。
- ②指導計画と評価を作成する際に、IBのATLスキルを活用する。
- ③指導方法に焦点を当てた校内研修を実施する。

(1) グローバル探究 I

グローバル探究 II の論文発表を念頭に置きながら年間指導計画を策定する。探究スキルの習得、問題の理解、事例研究、リサーチ活動、グローバル思考の醸成を年間指導計画の中心に位置づける。探究成果をポスター化し、様々な機会を捉えて発表させ、探究内容のブラッシュアップを図らせる。

(2) グローバル探究 II

グループ活動の探究成果である研究論文の発表から逆算的に年間指導計画を策定する。探究テーマについての構想発表会、夏季アクションプラン、中間発表会を年間指導計画の中心に位置づけ、大学との連携を一層取りながら目標の達成を目指す。

また、探究テーマに関連した各種コンテスト等への応募出場を励行し、探究内容のブラッシュアップを図らせるとともにネットワークを構築させる。

(3) グローバル探究 III

自グループのみならず他グループが明らかにした探究内容を参考にしながら、自分自身の興味関心の観点から再整理させる。

また、国際シンポジウムの開催を通して、SGH事業の成果を発表するとともに、探究内容を広く国内外に発信する。

2 英語学習の充実

(1) 英語における課題研究

英語表現 II (普)、Global Education I (英)

外部講師も活用しながら英語で探究活動を行い、その講義・演習を通して、テーマ理解と共に発信に必要な英語力の向上を図る。また、英語授業で学んだグローバルな観点を日本語での探究活動に活かす力を付ける。

英語課題探究 (普)、Global Education II (英)

7月実施の「国際シンポジウム」に向けて、英語プレゼンテーション及び英語による運営や進行を行い、その事前事後を含む活動を通じて、英語で発信する力を付ける。

【第1回グローバル教育推進委員会でのご意見】

- ・生徒に求める活動や目標を明確に示すようにしてはどうか。(グローバル・リーダーの資質と能力に「郷土や我が国、国際社会の発展に貢献する志を持ち…」とは生徒にはわかりにくい。自分が好きなこと、得意なことを通じてよりよい社会を共生できる社会にすることが目的という観点で説明すれば、生徒も腑に落ちるのではないか。)
- ・実施2年目となることで、1年生と2年生の2つの学年間で情報共有をしながら取り組みを進めてほしい。
- ・主体的にさせるのではなく、生徒が自分のやりたいことを見つけて、夢中になるような取り組みにしてほしい。
- ・「自己管理能力」の項目をルーブリックの中に入れてはどうか。

【第2回グローバル教育推進委員会でのご意見】

- ・授業で身に付けさせる具体的な知識(コンテンツスキーマなのかフォーマルスキーマなのか)を明確にする。
- ・IB研究校であることを意識しながらSGHの取組や評価を進める。
- ・IB教育導入を見据えた全体設計をし、普通科も含めた全ての生徒の能力育成を図る。
- ・教科横断的に英語学習のモチベーションを高める研究を願いたい。
- ・英語によるディスカッションが成立するには、英語に触れる時間が2,500時間必要である。ゴール設定に無理がある。日本語によるディスカッションということであれば、ディスカッションとは何かということを知習得できれば、大きな成果になる。まず、ディスカッションできる環境(間違っても良い環境)をつくるのが大切である。
- ・設定目標を共通認識するためにも評価についての研修をしてはどうか。

平成 28 年度の取り組み状況 (D)

- 多書は、週末課題(1年)や授業中の帯活動(2年)で実施
- 多聴・多話は、ディベートや帯活動で実施

【成果】

- ①英語プレゼンテーションや、普通科1年及び英語科のオールイングリッシュによる指導に対する抵抗感はほとんどなくなった。
- ②話し続けられる時間や一定時間内に書ける語数が伸びた。

3 教科・科目のSGH化(探究型学習)

- ①日本史B(2年):「蝦夷支配の歴史的な政策とその影響」、「国風文化における女流作家の誕生」
- ②政治経済(2年):「国際連合における各国の役割・立ち位置」
- ③数学I(1年):「黄金比と白銀比」
- ④数学B(2年):「図形と式の問題をベクトルでアプローチ」
- ⑤物理基礎(2年):「大谷翔平は本当に垂直に投げられたのか!」、「滑り台の最下点での速度は?」:(3年)「様々な運動のv-tグラフを考えよう」
- ⑥化学基礎(1年):「元素を紹介しよう」
- ⑦地学基礎(1年):「人類移住計画」
- ⑧化学(2年):「化学平衡のベストな解を求めよう」
- ⑨英語表現II(2年):「Let's introduce a city/town in Kochi!」
- ⑩家庭基礎(1年):「ホームプロジェクトの実施・発表」

【成果】(教員対象「学校評価アンケート」結果より)

- ①「生徒の社会課題に対する関心が授業活動を通して育っている」
肯定的回答 57.1% 否定的回答 42.9%
- ②生徒の問題発見力や問題解決力が授業活動を通して育っている
肯定的回答 45.2% 否定的回答 54.8%

4 評価の充実

- ①グローバル探究用ルーブリックの作成
- ②「振り返りシート」の活用
- ③「グローバルリーダーの資質・力量」ルーブリックの改善
- ④「グローバルリーダーの資質・力量に関する意識調査」の実施(2月1日)
- ⑤「グローバルリーダーの資質・力量に関する評価」の実施(教員による生徒評価、1月20~27日)

【成果】

- ①発表を評価するためのルーブリックや研究論文を評価するルーブリックを作成することができた。
- ②担当者が協働で評価することによって評価の信頼性・妥当性を担保できた。
- ③生徒による自己評価(意識調査結果より)

資質・能力	学年	H28.2	H28.5	H29.2	備考
①世界の中での日本人としての文化的アイデンティティ	60期生	—	4.96	4.82	◆59期生:有意に上昇
	59期生	4.76	4.73	4.99	
	58期生	4.85	—	—	
②幅広い知識と教養	60期生	—	4.69	4.48	◆59期生:有意に上昇 ◆59期生2月>58期生2月
	59期生	3.96	4.44	4.61	
	58期生	3.97	—	—	
③コミュニケーション能力	60期生	—	4.85	4.74	◆59期生:有意に上昇
	59期生	4.41	4.49	4.72	
	58期生	4.55	—	—	
④リーダーシップ	60期生	—	4.86	4.74	◆60期生:有意に下降 ◆59期生:有意に上昇 ◆59期生2月>58期生2月
	59期生	4.41	4.49	4.72	
	58期生	4.42	—	—	
⑤課題発見・解決力	60期生	—	4.56	4.34	◆60期生:有意に下降 ◆59期生:有意に上昇 ◆59期生2月>58期生2月
	59期生	4.14	4.31	4.55	
	58期生	4.22	—	—	
⑥社会課題に対する関心	60期生	—	4.88	4.66	◆59期生:有意に上昇 ◆59期生2月>58期生2月
	59期生	4.56	4.66	4.95	
	58期生	4.41	—	—	

満点は7.0点 有意水準は1%

課題と今後の取り組み (C、A)

3 教科・科目のSGH化(探究型学習)

- ①先進校での授業視察結果を教科にフィードバックするとともに、授業実践し省察を行う。
- ②派遣教員の公開授業を実施し、授業研究を通してそのノウハウを共有する。

4 評価の充実

- ①グローバル・リーダー像の資質・力量に係るルーブリックについて、IBのATLスキルを織り込みながら再整理する。
- ②生徒の自己評価能力が高まるよう、内省が充実するための条件整備を行う。
- ③教員の評価能力が高まるよう、「指導と評価」に関する研究者等を招聘し、校内研修を実施する。

5 中四国のSGH校との連携

- 第2回四国SGH高校生会議への参加を図るとともに、教員を派遣している東京学芸大学附属国際中等学校との連携についても模索したい。

6 探究学習の成果を発表する場の設定

- 基本的に平成28年度に参加した大会等には応募するよう計画。

7 組織体制の充実

- ①「報連相」と「命解援」の徹底。
- ②グローバル教育部の組織マネジメントの支援を図る。

平成 28 年度の取り組み状況 (D)

- ・59 期生(2年生)は、全ての因子で有意に上昇している。
- ・59 期生(2年生:実験群)と 58 期生(3年生:統制群)を比較したとき、「幅広い知識と教養」、「リーダーシップ」、「課題発見・解決力」、「社会課題に対する関心」因子において有意な差が見られた。



○SGH事業カリキュラムを通して、目指すグローバル・リーダーの資質・能力が形成されつつある。

④担当教員による生徒評価

資質・能力	教員評価	自己評価
①世界の中での日本人としての文化的アイデンティティ	—	—
②幅広い知識と教養	3.46	3.45
③コミュニケーション能力	3.58	3.80
④リーダーシップ	3.73	3.69
⑤課題発見・解決力	3.73	3.45
⑥社会課題に対する関心	3.68	3.85

*満点は5.0点

○各資質・能力に対する評価間の差異が少ないことから、尺度に対する生徒の自己評価の信頼性は高いものと考えられる。

5 中四国のSGH校との連携

第1回四国SGH高校生会議への参加(10月15・16日、愛媛県立松山東高校、8名)

6 探究学習の成果を発表する場の設定

- ①ハイスクール世界サミット in 福島への参加(8月6日、2名)
- ②高知県高等学校国際教育生徒発表大会への参加(2グループ、個人2名)
- ③世界津波の日「高校生サミット」への参加(11月25・26日、5名)
- ④高知県地方創生アイデアコンテストへの応募(6グループ、12月18日)
1グループ(4名)敢闘賞受賞
- ⑤第4回「国際問題を考える日」(兵庫県教育委員会・大阪大学、2グループ発表、2月11日、40名)
- ⑥SGH甲子園(関西学院大学、1グループ発表、3月19日)

7 組織体制の充実

- ①SGH推進の校務分掌組織としてグローバル教育部を新設。
- ②全校的な推進となるよう、定期的にSGH推進委員会を開催して、事業の進捗管理を行うとともに、生じた課題や事業に係る進取の情報についての共通理解を図っている。
- ③グローバル探究の進捗管理のための授業検討チーム会を毎週開催。そこでの授業計画を授業担当者会で周知。また、授業担当者会で出された前時の授業に対する意見等を授業検討チーム会でフィードバックしている。